

## 令和五年 年頭のご挨拶

明けましておめでとうございます。

コロナ感染パンデミック、ロシアのウクライナ侵略が続いています。今年も状況は変わらないと予測しています。

本県のコロナ対応は多くの関係者の並々ならぬ努力により直近(1月3日)で人口100万人あたりのコロナ死者全国平均461.7人に対し130.9人、格段に少ない県でした。

他方、地域医療構想、公立・公的病院再編、公民格差問題に大きな進展はなく、根底に最新の医師偏在指標全国最下位の医師不足があることは共通の認識かと存じます。

当法人は以前より県外からの支援も積極的にお願いして来たこともあり、ここ数年医師数は少しずつですが増加中、職員の意気も上がり大変有難いことです。若い医師たちにとって他大学出身者と研修を積むことは新鮮かつ将来への財産にもなります。

昨年は1月に悠遊健康村病院に新築した透析施設が始動、3月に長岡市東西道路が全開通し、立川綜合病院と同院が最短で結ばれ、移転事業の一区切りが出来ました。4月から不妊治療が保険適応となり生殖医療センターは益々活躍中です。一昨年立川綜合病院に始動した呼吸器センターは手術件数が飛躍的に増加中です。

悠遊健康村病院の透析施設は立川綜合病院腎センターと信濃川を挟んでライフラインが別建てで災害時の事業継続体制(BCM)が整いました。このBCMや立川綜合病院の基本設計も期せずしてコロナ感染対策に著効しました。

立川綜合病院は“最強の雪国仕様”に設計されてもおり、昨年末の雪害にも病院機能は全く問題なく維持できました。ただし立川綜合病院へのアクセスとくに東西道路が2車線であることにより周辺道路が大渋滞となり、患者、職員、さらに救急指定日でもあり多くの救急車が渋滞に巻き込まれました。早急にフェニックス大橋を含めた4車線化、柏崎厚生病院とも最短で繋がる連絡道路の早期完成を関係各機関をお願いしていきたいと存じます。

社会基盤の不安定化が続く中、新潟県の地域医療が「萎縮」「縮小」マインドに陥っている可能性はないでしょうか。歴史を振り返って見れば越後の国～新潟県は少なくともここ数百年、幾多の試練や国難も乗り越えてきました。さらに言えば縄文時代から数千年続いている地域社会です。私たちはまさにその大地の上に立ち、その恩恵を受けて今日に至っております。今こそ先人から受け継いだ底力を信じ前向きに歩んでいく時です。

様々な試練に直面する中、私たち法人が出来ることは民間医療機関である特性を最大限生かし救急医療をはじめとした地域医療の質と量の堅持、医療需要変化への迅速な対応、医療人育成を含めた未来への投資を着実に進めていくことと認識しております。

本年が皆様にとって実り多い良い年になることを心より願い、年頭のご挨拶とさせていただきます。

医療法人立川メディカルセンター 理事長 吉井 新平